

大阪府立大学将棋部
昭和 60 年前半～平成初期 知られざる「準黄金期」

昭和 60 年入学 江川 治彦

◆「黄金期」は後輩にとっても大いなる誇り

平成 27 年（2015 年）度の府大将棋部 OB 会に十数年ぶりに参加させていただき、あらためて府大将棋部の歩んできた歴史の長さを実感するとともに、昭和 40 年前半頃のいわゆる「黄金期」を支えた諸先輩 OB の方々の強さ、層の厚さがよくわかりました。語り草になっている昭和 44 年の東西決戦、対慶応戦は府大将棋部の華であり、我々後輩にとっても大いなる誇りとなっています。

◆知られざる「準黄金期」とは？

「黄金期」を彩られた OB 諸先輩方をご存知ないかもしれませんが、この輝かしい「黄金期」の約 20 年後、昭和 60 年前半～平成はじめ頃に「準黄金期」ともいうべき時期がありました。

「黄金期」の後も A 級リーグにたびたび返り咲き、個人戦でも昭和 50 年学生準王将の土橋哲さんをはじめ多くの先輩強豪が活躍されましたが、私が入部した昭和 60 年当時の府大将棋部は関西リーグ B 級Ⅱ組、決して強豪校とはいえない位置にいました。しかし、ここから府大将棋部は毎年昇級を重ねて 1 年後には A 級に昇級し、そのまま 5 年以上 A 級に定着し続けたのです。当時の関西強豪校は京大、同志社大、立命館大、関西大で、阪大、神戸大がそれに次ぐ存在でしたが、昭和 60 年～平成初期には府大がその中に割り込み、A 級の常連として常に優勝候補の一角を占め続けました。

◆「準黄金期」を支えたメンバー

当時の府大将棋部の一軍メンバーは、昭和 59 年入学の西川太二さん・那須徹さん・川人寛司さん、昭和 60 年入学の山本政寿君・江川治彦、昭和 61 年入学の八劍保武君・谷川和男君・小林高史君・昭和 62 年入学の小西百年君、平成 1 年入学の朝月英明君でしたが、これらの方々に匹敵する実力者が他にも各学年数名ずつ居ました。入学当時の私は町道場の四段レベルでしたが、部室では西川さん、那須さん、山本君をはじめとした先輩同輩諸氏にかなり負かされた記憶があります。また後に続く新入部員も毎年粒ぞろいで、年を追うごとに部員の層が厚くなっていきました。八劍君・小林君・朝月君のように入部当初から強い人もいましたが、谷川君・小西君・田中勉君（昭和 62 年入学）・友永尚樹君（昭和 63 年入学）・岩瀬琢也君（平成 1 年入学）のように入部後に強くなる人たちも多く、

常に二段～四段くらいの層が分厚かったように思います。人物も将棋も個性豊かな面々が集っていた世代でした。

◆「準黄金期」の特徴 その1

この頃の府大将棋部の特徴は、個人戦での強さにあったといえます。関西学生個人戦では、61年春に西川さんが優勝、秋に西川さんが3位、62年春に八劔君が準優勝、秋に西川さんが2度目の優勝、63年春に山本君と私が3位、秋に私が3位、平成1年秋に朝月君が1年生ながら優勝、平成3年秋に朝月君が準優勝と、毎年のように上位に進出し、学生名人・学生十傑戦に代表を送り続けました。極めつけは西川さんで、昭和61年のアマ王将戦関西予選・アマ名人戦大阪予選で連続代表、昭和62年の赤旗名人戦で全国優勝と、学生の枠を超えて全国クラスのアマ強豪として活躍されました。当時は現役の学生強豪がアマ棋戦で活躍するケースは稀で、昭和62年アマ名人の古賀一郎さん（九州大）と双璧でした。私も西川さんの影響で一般大会に積極的に参加し、昭和62年の正棋会最上位リーグでは優勝することができました。個人レベルでは、常に関西アマチュアトップを意識したレベルの高い活動が出来ていた時代でした。

◆「準黄金期」の特徴 その2

ところが個人戦の活躍の割に、なぜか一軍戦では星が揃わず、平成1年春の3位が最高という有様。B1級上位校との入れ替え戦でA級陥落の危機を辛うじて凌いだことも数回ありました。西川さん・那須さん・私・山本君・八劔君らの布陣（関西学生準名人の八劔君が五将という層の厚さ！）で挑んだ昭和62年秋は、「準黄金期」の中でも屈指のメンバーが揃ったと思われたのですが、私が足を引っ張りまくって4位に終わってしまいました。

唯一のなぐさめは、西川さんや那須さんが抜けた昭和63年・平成1年に2年連続で最強校戦（当時は5人制の学生団体トーナメントで、夏に行われる西日本学生団体戦の関西第二代表を決める棋戦でした）で、既に一軍戦で優勝して代表を決めていた京大に次ぐ2位に入り、西日本の本大会で京大や九州大をおしのけて4位・5位（北信越・中部・関西・中四国・九州の各地区代表計10校参加。当時の大将クラスは九州大の古賀一郎さん=現役のアマ名人、広島修道大の宮本浩二さん=後のアマ名人・白石雅彦さん=後のアマ準王将、金沢大の前川尚三さん=学生王将・後の平成アマ最強、名古屋大の天野高志さん=後のアマ名人・アマ王将・朝日アマ名人、等の錚々たる強豪が揃っていました）に食い込んだことくらいでしょうか。「お前なあ、俺が卒業する前に勝ってくれよ！」と言った西川さんの言葉が忘れられません。

これだけのメンバーであれば本来は関西優勝の1つや2つはあっておかし

はなかったと、今でも非常に残念に思っています。その責任の大部分は、急所の星を落とし続けた私にあったことは間違いありませんが、朝月君が入学してきたのが西川さん・那須さんが卒業された年であったことも見逃せないポイントでした。仮定の話をして仕方が無いことですが、西川さん・那須さん・朝月君が同時期に重なっていたら、そして私がまともに機能していたら、これは「黄金期」に匹敵するような大噴火があったかもしれません。

私個人としては、東西決戦後に辻清治さんが感じられた心境ほどのドラマティックな感情の動きはなかったのですが、それでも未達成感ともいべきほろ苦い思いがあったのは事実です。平成 2 年に府大を卒業し同年に琉球大医学部に再入学して沖縄に移りましたが、沖縄で 12 度のアマ戦県代表になり（うち全国大会出場は 6 回）、全九州規模の大会では上位入賞の常連になれたのも、団体戦での悔しい思いが原動力になっていたのだと思っています。

◆「準黄金期」の一員としての誇り

アマ棋戦の現役全国王者・現役県代表・関西学生個人戦優勝入賞メンバーが多数揃いながら、個人のキャラクターが突出して足並が揃わなかった時代、その結果「第 2 黄金期」になりきれなかった少し残念な時代。それが「準黄金時」の実態でした。

「準黄金期」のメンバーは卒後それぞれの道を歩み、気が付けば皆 40 代後半～50 代前半の年齢に差し掛かりました。長らく相互の連絡がとれない時期がありました。数年前から連絡をとりあって（幹事の田中君にはいつもお世話になっています）1 年に 1 回、1 泊の OB 合宿を行うようになりました。さすがに現役学生のように分厚い脚付き将棋盤を持参することはありませんが、対局時計・駒・酒・おつまみを完備して、学生気分でわいわいと楽しく対局しています。富山在住の那須さん、静岡在住の谷川君、広島在住の朝月君などの遠征組もおり、年々参加者が増えています。「準黄金期」の一員として、府大将棋部の名前を冠した OB 合宿を開催できていることは、我々世代の誇りです。

出来ることであれば、「黄金期」vs「準黄金期」の世代間対抗戦が実現すれば楽しいですね。